様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２１４７

研究課題名（和文）ジェームズ・ティソと同時代のイメージ文化：≪パリの女≫シリーズに見る類型的表現

研究課題名（英文）James Tissot and modern visual culture : Characteristic representations in his Femme a Paris series

研究代表者
吉田　紀子（YOSHIDA, NORIKO）

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：２０４３３８７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀フランスの画家ジェームズ・ティソ（1836～1902年）による15点の油彩画≪パリの女≫シリーズ（1883～1885年）とその版画作品を通覧し、シリーズの企画意図、作画過程、最終的に不評に終わった公開後の展開とその理由について、油彩画初公開時の展覧会目録、同時代の服飾文化雑誌、ティソの自筆書簡、関係画廊の帳簿記録といった未公開資料を含む一次資料を検証材料として明らかにした。観衆層の期待を勘案しながら、一般商業用リトグラフを下敷きにタブローの要件を伴って構成した自らの油彩画を、同時に美術愛好家に向けてはエッチング化して販売するという、ティソ独特の制作姿勢と手法を指摘することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1871年からのロンドン時代の画業に研究の主眼が置かれてきたティソに関して、1882年のフランス帰国後、パリ画壇復帰を目指して取り組まれた≪パリの女≫シリーズの実態を精査し、油彩画と版画の双方の造形的特色を多角的に分析することを通して、本シリーズがティソ画業に占める重要性を新たに浮かび上がらせることができた。またその際、商業用・実用のリトグラフと愛好家向け・鑑賞用のエッチングという版画技法による位階的区別が存在し、当時、この価値観が大きく変化しようとしていた状況を指摘した。19世紀最終四半世紀の絵画と複製技術の関係に対して、美術史上の新たな研究視座を提示することができたと言えよう。

研究成果の概要（英文）：This is a study of Femme a Paris series (1883-1885) by the nineteenth-century French painter James Tissot (1836-1902). Through a detailed examination of primary documents including unpublished material such as the first exhibition catalogue, fashion culture magazines from the period, handwritten letters of Tissot, and the account books of related art galleries, this study examines the fifteen large paintings and printed works of the series, and explores Tissot's motivation, the creative process involved, and the main reasons behind the finally unpopular reaction from the public. Very conscious of the public's response, Tissot composed these oil paintings according to the conventions of the tableau while referring to commercial lithographic fashion prints. He then remade the oil paintings as etchings with the purpose of selling them to amateur art collectors. This, the study suggests, might be a method of creation original to Tissot.

研究分野：美術史

キーワード：ジェームズ・ティソ　パリの女　フランス近代美術史　版画　リトグラフ　エッチング　複製芸術　女性表象

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）先行研究とその課題点

1980 年代以降のフランス近代美術史の見直し作業は、ポスト構造主義的な人文科学の方法論の見直しとも相まって、アヴァン=ギャルドとアカデミズムを包括した総体として、19 世紀の美術史を捉える新たな視点を確立してきた。同時に、受容史、フェミニズム、文化相対主義、視覚文化史といった視点を伴いながら、美術批評、美術行政、画商の役割、展覧会、ロー・アートとハイ・アート、ファッションやレジャーとの関係など、大きな意味での社会史的研究を促してきた（日本語での総括として、永井隆則編著『フランス近代美術史の現在　ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』、三元社、2007 年）。

こうした研究動向の中で、アカデミックな技法で現代的主題を扱う折衷画家として活躍したジェームズ・ティソ（James Tissot：1836-1902）をめぐっても、主として回顧展とそれに伴う浩瀚な図録（Krystyna Matyjaszkiewicz, *James Tissot, 1836-1902*, Paris, Musée du Petit Palais, 1985 ; Nancy Rose Marchall, Malcom Warner, *James Tissot. Victorian life/ modern love*, Yale University Press, 1999 ; Cyrille Sciama, *Jamaes Tissot et ses Maîtres*, Musée des Beaux-Arts de Nantes, 2005）を通して、研究が蓄積されてきた。その画業評価が近年急速に高まっていることは、オルセー美術館（フランス）が 2011 年に、彼の油彩画≪ロワイヤル通りのサークル≫（1868 年）を新収蔵した事実からも明白である。また 19 世紀後半の風俗画という観点から、ティソ理解を新たに切り拓く試みも認められる（Michaël Vottero, *La peinture de genre en France, après 1850*, Presses universitaires de Rennes, 2012）。しかしながら、ティソの作品総目録は未だ刊行されておらず、我国においても重要な論考が発表されているが（坂上桂子著「ジェームズ・ティソと休日のピクニック」、『夢と光の画家たち：モデルニテ再考』所収、スカイドア、2000 年）、同じ 19 世紀の印象派研究等と比べて、その数は多くはない。基礎研究を含めた仔細なテーマ研究は、国内外においてまさに諸に就いたばかりと言ってよい。

（2）本研究課題の着想に至る経緯

研究代表者は、2003 年のパリ第十大学美術史学博士論文『フランスにおけるポスターの芸術的・社会的評価の変遷（1889-1978 年）』（Noriko Yoshida, *La valorisation artistique et sociale de l'affiche en France (1889-1978)*, la thèse pour le Diplôme de docteur en histoire de l'art, Université de Paris X-Nanterre, 2003）以来、19 世紀末の広告ポスターに注目してきた。その後、ポピュラー・イメージと絵画の接近を主軸として研究を進展させ、当時、最も影響力のあったポスター・デザイナー、ジュール・シェレ（Jules Chéret : 1836-1932）に関する研究（Noriko Yoshida, « Jules Chéret et la critique d'art », in *Belle Époque de Jules Chéret, de l'affiche au décor*, Paris, Les Arts Décoratifs, Bibliothèque nationale de France, 2010 他）を経て、彼と新印象主義の画家ジョルジュ・スーラ（Georges Seurat：1859-1891）との影響関係を明らかにした（吉田紀子「シェレとスーラ：≪サーカス≫（1890～1891 年）に見る広告イメージの再解釈」、『仏語仏文学研究』、第 47 号、中央大学仏語仏文学研究会、2015 年他）。スーラは自作の中に、独自のやり方で広告イメージを引用していた事実の詳細を指摘したのである。これと並行して、2012 年度に中央大学在外研究員／パリ第十大学客員研究員としてフランスに滞在中、「19-20 世紀フランスのイメージ研究：複数性、複製可能性、大量生産性」を研究課題として対象を広げる過程で、1880 年代のティソの油彩画≪パリの女≫シリーズ（1883-1885 年）と、当時のイメージ全般との比較検討が重要な問題であると考えるに至った。なぜなら画業の初期より、同時代の瀟洒な室内調度や女性ファッションを描写することで成功を収めてきたティソにとって、広告や雑誌挿絵等の大衆向け複製イメージ類は、作品生成の上で欠かすことのできない要素であったと考えられるからである。

このように本研究は、研究代表者のこれまでの研究活動を踏まえ、視覚文化が多様化・マルチメディア化する 1880-1890 年代という歴史的文脈の下に、ティソ絵画を新たに位置付けようとするものである。またそれにより、既存の美術史学では見過ごされてきた、ハイ・アートとその外部がダイナミックに交流していた当時の実態を一層明らかにし、フランス近代美術史に新たな学術的視座をもたらそうとするものである。

２．研究の目的

本研究では、ティソ作品における油彩画とその外部という異なる視覚文化領域間でのイメージ交流の実態を明らかにするという目的の下、4 年間で次の三段階の目標を達成すべく、調査・研究の実施計画を立てた。

（1）≪パリの女≫シリーズ 15 点の油彩画および版画の調査（研究期間初年度～3 年目）：15 点の油彩画およびそれらに基づく版画には個人コレクション所蔵のものが一部含まれるが、全作品を実際に調査して、シリーズを再構成する画像コーパスを作成することが第一の目標である。所蔵先はフランスのほか、イギリス、アメリカ、カナダに及ぶため、広範囲な海外調査が必要となる。

（2）同時代のポピュラー・イメージ資料の調査（研究期間初年度～3 年目）：ティソはパリとロンドンを拠点に画業を築いたため、英仏両国の広告、ファッション雑誌などの調査を通して、画家が参照先としたポピュラー・イメージを特定することが第二の目標である。

（3）比較検討と総括（研究期間最終年度）：前年度までの調査結果に基づいて、ティソがポピュ

ラー・イメージから油彩画へ何をどのように転置したのか、作品生成の工程と手法を明らかにし、表現の類型性を指摘することが最終的な目標である。ハイ・アートである絵画における女性表象が、同時代のイメージ文化全般と何を共有し、また何を捨象していたのか、詳細に検討する。

３．研究の方法

（1）先行研究の精査

研究開始時の 2015 年度（平成 27 年度）には、不足する先行研究文献を古書市場から可能な限り買い入れ、徹底した読み込みと精査を行い、本研究課題の理論的枠組み（素案）を構成した。以後、国内外での作品および資料の調査結果を反映させながら、これを随時更新し、最終的な考察へと展開させていった。

（2）海外調査

2015 年度（平成 27 年度）から 2019 年度（令和元年度）にかけて、作品および資料に関する計 7 回の海外調査を次の諸機関において実施した。なお後述の通り、本研究は研究期間を当初予定の 4 年から 5 年へ 1 年間延長した。

① 2015 年度
第 1 回海外調査（2015 年 8 月 23 日～9 月 10 日）：フランス国立図書館、装飾芸術連合図書館（共にパリ）。

② 2016 年度
第 2 回海外調査（2016 年 8 月 20 日～9 月 8 日）：パレ・ルミエール美術館（エヴィアン）、フランス国立図書館（パリ）。

③ 2017 年度
第 3 回海外調査（2018 年 2 月 4 日～2 月 12 日）：テイト・ブリテン美術館、ブリティッシュ・ライブラリー（共にロンドン）、パリ市立プティ・パレ美術館（パリ）。

④ 2018 年度
第 4 回海外調査（2018 年 8 月 21 日～9 月 2 日）：フランス国立図書館、フランス国立美術史研究所図書館、パリ市立プティ・パレ美術館（全てパリ）。
第 5 回海外調査（2019 年 3 月 7 日～3 月 17 日）：クストディア財団、フランス国立美術史研究所図書館（共にパリ）。

⑤ 2019 年度
第 6 回海外調査（2019 年 8 月 21 日～9 月 2 日）：オルセー美術館、フランス国立美術史研究所図書館（共にパリ）。
第 7 回海外調査（2020 年 1 月 16 日～1 月 20 日）：サンフランシスコ美術館リージョン・オブ・オナー館（サンフランシスコ）。

（3）国内調査

研究の初期段階において、次の 2 機関で資料調査を実施した。

① 2015 年度
第 1 回国内調査（2016 年 3 月 29 日～3 月 30）：ポーラ美術館「Modern Beauty―フランスの絵画と化粧道具、ファッションに見る美の近代」展（神奈川県足柄下郡）。

② 2016 年度
第 2 回国内調査（2016 年 6 月～7 月計 2 週間）：文化学園大学図書館（東京都渋谷区）。

（4）研究協力者との意見交換

カトリーヌ・メヌー（パリ第一大学パンテオン・ソルボンヌ校准教授）、セゴレーヌ・ルメン（パリ・ナンテール大学名誉教授）、ステファンヌ・ゲガン（オルセー美術館学術顧問）、フレデリック・デビュイッソン（ランス大学准教授／フランス国立美術史研究所学術顧問）との間で意見交換を重ね、有益な専門知識をご提供いただくと共に、諸機関における資料調査に当たり便宜を図っていただいた。

４．研究成果

（1）主たる研究成果

国内外における広範な調査を通して、第一に≪パリの女≫シリーズ油彩画および版画の大部分を実見し、確認できたことが大きな成果であった。ただし、かねてより所在不明の作品については、一部探索を継続する必要がある。第二に、ティソが参照先とした可能性の高い同時代の服飾雑誌、生活文化雑誌を特定し、そこに掲載された具体的な挿図例を提示することができた。加えて、油彩画初公開時の展覧会目録、ティソの自筆書簡、関係画廊の帳簿記録といった、未公開資料を含む一次資料を検証材料として収集したことも、当初の想定を超える成果であったと考える。

こうした調査結果を踏まえて、領域横断という側面から複数の学会報告の後、研究最終年度の 2019 年 7 月には美術史学会東支部例会において、「ジェームズ・ティソ作≪パリの女≫シリーズ（1883～1885 年）―油彩画と版画（リトグラフ／エッチング）の双方向的関係―」というテーマで研究発表を行い、現段階での結論を公に問うに至った。その要旨は次の通りであるが、考察

の範囲は、油彩画とポピュラー・イメージという当初の範囲を超える地点に行き着いている。当時、商業用・実用のリトグラフと愛好家向け・鑑賞用のエッチングという版画技法による位階的区別が存在しながらも、この価値観が大きく変化しようとしていた状況について併せて指摘したのである。

パリ・コミューン崩壊後、1871 年にロンドンへ移住したジェームズ・ティソは当地において現代的主題を扱う風俗画家として成功を収めるが、1882 年には帰国し、翌 1883 年から 1885 年にかけて 15 点の大型油彩画から成る≪パリの女≫シリーズ（全作品、縦約 145×横約 100 ㎝の寸法）を完成させた。何気ないエピソードを主題にアカデミックな手法で女性ファッションや室内調度品を丹念に描き出す画風は、パリ画壇への復帰をかけたと言われる本シリーズにも引き継がれ、同時代の文化や流行に対する画家の強い関心と観察力が反映されている。これまでティソ研究の主眼はロンドン時代の画業へ向けられる傾向にあり、先行研究では帰国直後のこの大規模な取り組みに関して、画業全体の中での位置付けを探るといった体系的な考察は試みられていない。しかしながら、油彩画を当初より全版画化することを構想していた点に注目するならば、本シリーズは油彩画とその版画化という手順に対する画家の認識を総括する重要な側面を含むものと考えられるのではないだろうか。こうした問題提起は、写真技術利用も含め、近年、関心が高まる 19 世紀後半の絵画と複製技術の複雑な関係を解きほぐす一助ともなるであろう。

本発表では、油彩画≪パリの女≫シリーズとその版画作品を不可分のものとして捉え、それらを通覧した上で、シリーズの企画意図、作画過程、さらには最終的に不評に終わった公開後の展開とその理由について検証する。1885 年の油彩画初公開時の展覧会目録、わずかに存在が確認されているティソの書簡、関係画廊の帳簿記録といった一次資料に加えて、1880 年代前半にパリとロンドンで同時刊行されていた服飾雑誌・生活文化雑誌を新資料として用いる。

ティソはすでに 1860 年頃から銅版画（エッチング）を手掛けていたが、ロンドン時代後半にはもっぱら自らの油彩画に基づく複製版画を制作するようになっていた。油彩画の精緻な描き写しという性格が強い版画の販売は、彼の大きな収入源になっていたとも言われる。その後、1885 年にパリ、1886 年にロンドンで公開された≪パリの女≫シリーズでは、油彩画公開時に版画の予約購買が一斉募集されるという一層組織的な段階が踏まれた。またそもそも本シリーズの油彩画自体が、雑誌挿絵等の当時の一般向け商業版画（リトグラフ）をイメージ・ソースとしている可能性が高く、これらの事実からは、観衆層の期待をすくい上げながら、一般商業用リトグラフを下敷きにタブローの要件を伴って構成した自らの油彩画作品を、今度は美術愛好家向けにエッチング化するという、ティソ独特の制作姿勢が見て取れるのである。本発表を通じて、フランス帰国直後のけっして平坦ではなかったティソの仕事ぶりをうかがうと共に、彼の作画において油彩画と版画（リトグラフ／エッチング）が結んでいたこうした双方向的な関係について明らかにしていきたい。

（2）今後の展望

本研究は、2018 年度に研究代表者が所属研究機関を変更した関係で、研究計画の見直しを図り、研究期間を 1 年間延長することとした。十分な研究期間を確保することで、調査のみならず、考察を整理して上述のような研究発表に臨むことも可能となった。さらに最終年度の 2019 年度には、サンフランシスコとパリで大規模かつ国際的なティソ回顧展（*James Tissot Fashion & Faith* ; *James Tissot L'ambigu moderne*）が開催されるという幸運な偶然も重なった―ティソ芸術に対する学術的関心が集約する時機到来という意味では必然であった―。この回顧展で開示されたティソ研究の現状と最新データ、並びにフランス側監修者との人的ネットワークを得て、今後は本研究課題での成果を日仏共同研究へと発展させていきたいと考えている。そしてその具体的な下準備と事前の交渉を開始している。

他方、美術史学会例会での口頭発表に関しては、今後、論文として取りまとめ、研究代表者が 2021 年度中の刊行を目指す図書に収録する計画である。本書の刊行を通して、研究内容に対するより一層のフィードバックを得られるものと期待する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 吉田　紀子
２．発表標題 ジェームズ・ティソ試論：≪パリの女≫シリーズ（1883～1885年）と同時代のイメージ文化
３．学会等名 学習院大学哲学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田　紀子
２．発表標題 領域横断する芸術家ロートレックのポスター
３．学会等名 美術史学会（全国大会シンポジウム）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田　紀子
２．発表標題 ジェームズ・ティソ作≪パリの女≫シリーズ（1883～1885年）―油彩画と版画（リトグラフ／エッチング）の双方向的関係―
３．学会等名 美術史学会（東支部例会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田　紀子
２．発表標題 トゥールーズ＝ロートレックの／とポスター
３．学会等名 学習院大学人文科学研究所（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2017年1月～3月に学習院生涯学習センターにおいて講座「フランス美術の近代：ジェームズ・ティソ試論」を実施し、社会の広範にわたる研究成果の還元を試みた。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	メヌー　カトリーヌ (MENEUX CATHERINE)	パリ第一大学パンテオン・ソルボンヌ校（フランス）・准教授	
研究協力者	ルメン　セゴレーヌ (LE MEN SEGOLENE)	パリ・ナンテール大学（フランス）・名誉教授	